

よりよい授業を目指して

目指しはするが……何に「よりよい」?

品川 哲彦（人間文化コース助教授）

よりよい授業をめざしているか？工夫してこなったわけではない。ただし、最も腐心したのは予備校教師時代だった。当時の手本はテレビの料理番組。最初に見通しを明示してみせ、前提をとりそろえ、段取りよく運んで、ついには、自分でできると思わせる。今でも、あれは授業のひとつの理想型だと思う。ところが、前回、奈良先生も記されたように、大学は予備校と違う。学生に共有された目標があるとはかぎらない。あるとしても、いつそう長期の目標だろう。それでも、わかりやすい授業にする工夫は同じかもしれない。今年、教養的教育のパッケージ別科目がはじまった。同科目は非専門性、つまり専門以外の領域を学ぶことを授業の目標としている。それゆえ、わかりやすさが優先される。そこで、同科目で行っている、さはいえ、月並みな工夫を述べて責めをふきごう。

(1)プリント：毎回、プリントを配布し、その最初に、当日の話の流れ、前回との話のつながりを記している。この部分を切り張りすれば半年間の講義のアブストラクトになるというのが理想だが、そこまでは完成していない。ほかには、引用文、術語があればその解説など。(2)板書：弱っている。板書しなければ手が動かない学生は論外としても、学生がノートできないというのは、話を聞きながら要点をまとめる力が落ちたからだろう。論旨を正確に伝えるために文尾まで記しているので、当然、量は増える。学生の反応は「後で読み返してわかるからありがたい」「手が疲れる」、さまざま。(3)質疑応答：毎回、質問用紙を配り、次週に問ないと答えを並記したプリントを配布している。たいへん手間がかかる。休日出勤せざるをえない。だが、はょった部分や論理の間隙をつく質問もあって、講義の補完にはなる。機知に富んだ質問もある。「難しかった」、ただそれだけの感想もある。これでは生協食堂への一言カードの「うどんの汁が辛い」と大差ない。それでも、大学の授業もまた商品ではないか。私はなかばそれを認めざるをえない。

が、こうした工夫を重ねるほど、学生に知識を伝え、疑問をもつべき箇所で考えさせ、いっそ理解を深めるようにしむける教師主導型の授業になってしまう。ファイヤーアーベント『知とは何か：三つの対話』(新曜社)には、教師、学生とりまして複数の人間が討議することそれ自身が目標であるような授業が出てくる。もちろん、確固たる知識や結論を求める学生は不満をもつ。しかし、これこそ「華やぐ知恵」(ニーチェ)に通じるかもしれない。大学の授業はかくあるべきか？ご冗談を。教育熱心な今の大学がそれで満足しますか。かといって、総合科学部の教育が何をめざすべきか、明確な答えは出でていないのだ。その目標なしに「よりよい／悪い」という判断をつけられよう。ちなみに、このコラムのスペースは今回から半減したそうだが、それもまたそのせいかもしれない。

東千田キャンパスからうまれた私の大学観

山尾政博（鹿児島大学水産学部 助教授）

(1987-1991年 地域文化コース アジア研究講座 講師)

昨年9月、総合科学部で非常勤講師として集中講義をする機会を与えられました。

6年前まで地域文化コースに教官として所属していたことから、受講してくれた見ず知らずの学生の皆さんにも懐かしさを覚えたものです。とはいっても、私がいた頃の総合科学部は東千田にあり、今とはまったく様子が違います。外壁にシミの目立つ校舎、そばを通ると匂うトイレ、全国的に有名になったプレハブの研究室や演習室など、今では想像もつかないものばかりです。

私は、テニス・コート横のプレハブ研究室に4年間おりました。困ったのはトイレ。プレハブの中にはありません。離れた建物まで雨の日は傘をさし、夏は暑い日差しを避けながらのトイレ通い。台風が近づいた日などは悲惨なものでした。いつトイレに行くかというタイミング、これを間違えると時間のロスになります。最初のうちは随分と無駄をしました。現代人にとって快適なトイレがいかに大切かを思い知らされました。トイレ施設の充実を無視しがちな大学や公共施設のあり方に問題を感じるようになりました。

総合科学部でのトイレに関する経験は強烈なものでした。今の大学もご多分にもれずひどい状況でした。毎年人数が増えていく女子学生への対応ができず、女性用トイレの不足は決定的でした。男女兼用が主流でした。水産学部という特殊な学部で、男社会が長年にわたって続いてきたことによるものでしょうか。私は女性用トイレを増設する運動を行ななかで、こうした施設整備の遅れは、学部や大学が将来展望に関わる問題を抱えているのではないかと思うようになりました。

小子化が進むなかで地方の国立大学がどのように生き残っていくかは大きなテーマです。当然、女子の大学進学率の高まりをうまく吸収しなければなりません。魅力あるカリキュラム・コース、時代の要請にこたえうる教育体系作りが基本です。これに加え、女子学生に配慮した教育環境面での充実が必要になります。トイレの整備はその一つです。残念ながらこの当たり前のことが十分に行われていない大学があります。そうした大学に果たして生き残れる力があるかどうかははなはだ疑問です。

施設面の不自由さを除けば、東千田キャンパスのプレハブは自由な雰囲気がありました。同じ棟には所属の異なる多数の教官がおられました。外にあるため開放的な雰囲気に溢れ、それぞれの部屋への行き来も活発でした。分野を越えた若手教官との交流は（新参ものがプレハブに多かった？）は、今思えば私の大切な財産です。境界を越えた学問研究を行うには最適の環境ではなかったでしょうか。

新しいキャンパスに移った総合科学部の施設、そこに住む人たちにどの様な大学観を与えていくのでしょうか。自由な雰囲気の中で、強烈な個性を持った学生や教育・研究者が生まれ育っているものと思います。



インターネットと英語の洪水

加藤 徹

(総合科学部人間文化コース 中国語中国文学)

学生時代、中国を貧乏旅行していた時のこと。無錫（むしゃく）郊外の、田舎（ひな）びた大衆食堂に入って食事をしていると、薄暗い食堂の隅から日本語が聞こえてきた。見れば、黒い背広を着た初老の紳士と、白いYシャツ姿の若い男性が商談をしている。Yシャツの方は一見して中国人だが、不思議なことに、紳士の日本語にも少し訛（なま）りがある。二人の会話が一段落するのを待ち、脇からたずねてみると、紳士は笑い、自分は韓国の商社の社長なのだ、と流暢（りゅうちょう）な日本語で答えた。

日本にいる留学生どうしが日本語で会話する場面は珍しくない。が、無錫で聞いた日本語会話は、第三国で日本語が国際語として通用していた希有（けう）の場面だったので、今も鮮明におぼえている。

しかし、考えてみると、英語圏の国民は、ずっとこんな経験をしてきた訳だ。目下「インターネット」なるものが爆発的に普及しつつあるが、そこでは英語が事実上の国際標準語になっている。「ニュースグループ」はもちろん、日本人あての「電子メール」さえ、もし相手が海外にいるなら、先方のパソコンに日本語環境が装備されているとは限らないので、「文字化け」防止のため英語で書くことになる（ローマ字書きの日本語は、読みづらいうえ、同音異義語がしばしば誤読の原因になるので嫌われる）。この点はファックスより面倒だ。



ホームページも、海外からの閲覧者を考慮すれば、日本語表記だけでは不親切である。私も自分のホームページを作ったとき、日本語と並行して「ここには何が書いてあるか」を示す最低限の英語を使う方針をとった。ただし、つたない英語で負け惜しみも書き添えた。「英語は私にとって、中国語に次ぐ三番目の言語にすぎません。だからこのホームページの英語版の内容は、日本語版にくらべ、ずっとお粗末です。また、文字化けを防いでページの正しいレイアウトを表示するためにも、パソコンに日本語環境を装備するようおすすめします」

多少の英語を使ったからだろう、自分のホームページを立ちあげて以来、外国の見知らぬ人からも、ときどき感想の電子メールが舞い込むようになった。半分近くは非英語圏からのメールだが、それらも全て英語である。例えば、ある中国人からのメールには「日本人であるあなたがペキン・オペラ（京劇）のサイトを立ちあげていることを発見し、とても興奮しています。でも、ご存じのように、海外のパソコンには通常、日本語環境がありません。私たち中国人にも読めるよう、全部英語表記にしてください」と書いてあった（！）。もちろん丁重にお断りした。

今のところ、未知の外国人からもらった唯一の日本語メールは、シカゴ在住のアメリカ人からのものである。彼はローマ字で「あなたのアコーディオン・サイトを見ました。あした日本語ソフトを買いに行きます」と書いてきた。

ささやかながら、英語の洪水に一矢（いっし）むくいたゾ、と、思わずほくそえんだことであった。

広島化人間…

奥山 敬子

(社会科学研究科 国際社会論専攻 博士前期過程1年)

私は広島弁が大嫌いだった。何となく田舎臭くて希望と自信（？）に満ちて入学した頃は（いってみれば単にキャピキャピしていただけなのだ）絶対口にしようとは思わなかつた。

しかし西条の坂の多さに閉口して車の免許を取ることになり、住民票をこっちに移し、成人式のご案内も暑い盛りの夏休みに届くことになった。冬は苦手にしていた牡蠣も鍋に入れて食べられるようになり、西条柿まで頂くことになり、食欲が東広島化していくことはもはや抑えようもないことであった。また、一年の頃は雪が降ると大はしゃぎしていたものだが、最近は服一つ買うのでも「この厚さで西条の冬を乗り切れるか」なんてことばかり考えてしまうし、夕方のテレビの天気予報で明日の気温を見るときには西条のめやすを三次ではなく庄原をみなければならないことも気づいてしまった。私はもうすっかり東広島化人間なのであった。

けれど、「これだけは！」と最後の砦は結構守っていた。自動車学校の先生が「ブレーキをえっと踏むんじゃ」とかバイトの店長が「たちまち2週間きて下さい」とか言うのを聞くたび、言葉の感覚がおかしかった。滑雪のバイトでおばちゃんたちがしきりに「やれんのう」を連発するのもなんとなく田舎臭いと思っていた。だから私は西条に来て3年

くらいで広島カープも応援するし体はすっかり東広島化したけれど広島弁だけはしゃべらない東広島化人間であった。

私は良く言えば好奇心旺盛、悪く言えば根気がなくてバイトも転々とこなしていたのが、私の最大の転機が訪れる事になったのは卒論で忙しいはずの4年の10月のことであった。そのバイトは地元の人相手だったので、広島弁は気がきいていてとても優しげで感じがよかった。広大生の中には頑固に方言を守っている人も多いが、私は感じのいい広島弁をしゃべる東広島人間になることを目指した。そのバイトで感じのいいお姉さんの仕事ぶりに惚れたため、まずは形から入ってみたのである。でも実際「行ってみちゃってです？」というのはすごく勇気のいることでいつも胸をドキドキさせながら地元の人とわざわざおしゃべりをする。そんな仕事の楽しさをみつけ、そして広島弁の田舎臭いけれど優しい口調と人と人との和ませる力に惹かれたのである。

これが西条にきて早5年の東広島化人間が得た大学生活最大の経験である。



私の庭ー愛する倉橋島ー

村本直己

(理学研究科数学専攻 博士課程後期1年)
(数理情報科学コース 吉田清研究室)



最近、マルタイの女を撮った映画監督も亡くなり、色々な企業も倒産したり、何かと寂しい中、特にそんなこともおかまいなく過ごす日々が多くなっている。それではいけないと思い、色々な趣味に没頭する日がときたまある。と言っても勉強（専門の数学）が趣味と言う程殊勝な学生ではないので、海に山にときには合コン（？）に出かけている。ここでは趣味をしている時に起きた様々な出来事の一部を述べようと思うがたぶん話しがそれると思う。

それはある寒い日の静かな海の上で繰り広げられた茶番劇である。私が友人のK君（波止の上で布団をかぶってよく寝ているので踏まないように気をつけてほしい！）と釣りをしていると、いかにもおやじくさい人物（以下、おやじと略す）が声をかけてきた。

「たばこがほしいけー、100円くれんかのー。」
たばこが100円で買えるわけなかろうと思ったが、私はとてもよい子なので100円をあげ、その日は別に何事もなく終わった（ちなみにその日はアイナメ（30cm位）と言う魚が3匹釣れた）。後日、やっぱりK君と一緒に釣りに出かけた。基本的に我々は単純なので、前

本当はもっと書きたいことがたくさんあったのだが、スペースもなくなってきたのでこの辺りで終わらうと思う。結局私が言いたいのは、広大の理学部の斜め前の交差点では信号無視をして白バイにつかまる人が多いので皆さんも気をつけましょう（じゃー、気をつけてすればいいのかーなんて思ったあなた、ひねくれてますねー）。

追伸 ーこんなこと書いていいのかな？？？（いいんです！）ー

Eco page 部員募集中(仮)

山口孝一（総合科学部 2回生）



私が大学という「場」に求めるもの、それは一言で言うなら「様々な性格・考えを持つ人たちとの新たな出会い」です。高校生の頃、自分の進路を決めるに当たって、私は非常に悩みそうになりました。環境問題・現代社会について、文系だと理系だとと言う枠にとらわれずに勉強してみたいなどと言う想いはありました。ただ、こういう風なばんやりした動機だけで目的もなしに大学へ行って、果たして有意義な生活を送ることができるのかとすごく迷っていたのです。

が、もともと楽天家の私は「まあ、いいか。いろいろな人たちと一緒にいれば楽しいだろうし、そのうちにわかるだろう。」と、軽い気持ちで総科にやってきました。

入学したばかりのある日、「環境サークルアゴラ企画室 入部説明会」という黒板書きを見つけました。名前はかなりあやしげでしたが、「環境サークル」という名前に惹かれておそるおそる入説へ行きました。結局私はそのサークル（今はエコページという名前）に入りました。やっていることには興味があつたし、このサークルなら自分の日頃考えていることを実践できると思ったからです。このサークルをきっかけにして、私は全国各地の大学生を中心に、本当に沢山の人と会いうことができました。大学で多くの人と会いたいという希望は、とりあえずかなえられました。

大学にしろ環境サークルにしろ、自分のいるその「場」の人との関わりを通じて、私の中にあるばんやりしたもののが次第にはっきり

とした形を持っていくのだと私は感じています。その中に身を預けてしまえば後はどうにでもなるといっているではありません。ただ、自分で考え・動くことを忘れないければ、何とかいい方向に進んでいくでしょう。今までの大学生活を通じて、そう思うようになりました。

私が関心を持っている環境問題についても、同じような「場」が求められているのだと感じています。環境問題を考えるとき、出来るだけ多くの人がそれについて考えていくということが不可欠です。そのためには、環境について考えるきっかけと、実際に何かしたいと思ったときに手助けする母体（場）が必要です。

多くの人とのつながりから自分の想いを形にしていくことを、今私はとても楽しんでいます。また私のしている活動がまた違う人達にとっての「場」となればもっと楽しくなると考えています。

さて、話は変わりますが、私が入っている環境サークルエコページでは、この四月に「リサイクル市」というイベントをやります。これは、おもに卒業生からの不要品（家具・家電・本など）を新入生に譲り渡して使ってもらおうというものです、お金は実費だけです。ゴミも減るし、お金もかからないということでおもに大好評でした。新入生のみならず、寮から出られる方（何を隠そうこの私も）や留学生の方にも参加して欲しいので、ぜひ一度足を運んでみて下さい。

お初にお目にかかります

—新任教官紹介—

黒岩 丈介（数理情報科学コース助手）



昨年の7月1日付で、広島大学総合科学部数理情報科学コースの助手として赴任しました。生まれは本州の最北端の青森県弘前市です（1967年8月6日、現在ピチピチの30歳）。大学院修士課程修了まで弘前に住み、その後、少々大都会の仙台にある東北大学大学院工学研究科の博士課程に編入学し、1996年3月に無事博士を修得しました。約1年ほど東北大で助手をし、現在に至っています。

最後に、私は現在数理物理の目で脳の機能を解明しようと、日夜寝る時間をおしんで研究に励んでいます（？？）。今後も、宜しく御願い致します。

マディソン、ジェームズ・ヘンリー（地域文化コース 外国人教師）



James H. Madison teaches twentieth century United States history. For twenty five years he has taught at Indiana University, in America, a university much like Hiroshima University (although perhaps Indiana University students spend more time playing basketball). In 1997-1998 Professor Madison is the Fulbright Lecturer at Hiroshima University. The Fulbright program began more than 50years ago and each year sends American professors and students to Japan and also Japanese students and faculty to American universities. Professor Madison especially likes to teach about such issues as ethnicity, civil rights, political reform, World War II, Vietnam and other subjects that help students understand what America was and is today. He thinks that maybe his Japanese students at Hiroshima University are teaching him more than he is teaching them, however. He and his wife live in Saito; they have two children who are university students in America.

スティッピ、コートランド・アラン（外国语コース講師）



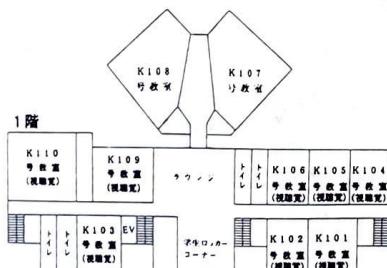
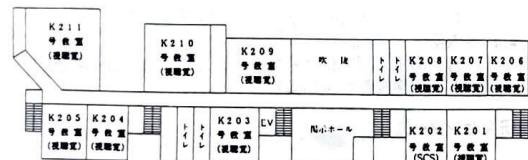
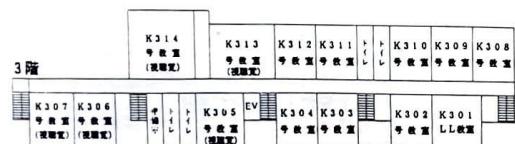
Hiroshima is the seventh university that I have been to. I grew up in England and started university there, firstly in York where I studied computer science, and then the University of California where I studied artificial intelligence. I changed my focus when I went to Edinburgh university and studied a masters degree in language processing-making computers speak and understand English. Actually teaching computers to speak English is even harder than teaching first year student. So when I finished in Edinburgh I went to Lancaster University and changed direction again, this time studying medical communication. My area of research was metaphors of illness in western and eastern medicine. Since then I have become more and more interested in medical language and will continue working in that field. I enjoy living in Japan and am very pleased to be working in the Faculty of Integrated Arts and Sciences at Hiroshima University.

K棟大図解

普段何気なく使っているK棟、
その秘密に飛翔取材班がメスを入れる！

1) 地図の話

まずこの地図を見てもらいたい。なんとトイレが1階から3階まで同じ場所にある。この事はトイレを探す手間が省けて一見良さそうに見えるが各階の区別が付きにくいという欠点もある。またその全てのトイレが階段の近くにあるということはトイレの使用頻度が高いためであろうか。急いで講義室に入るときでも落ち着いてトイレにでも入れということであろうか。他にもこの棟は3階までしかないのにエレベーターまであったのだ。きっと障害者用という事であろう。普通の学生は節電のため使用を控えるようにいわれている。また1階と2階の講義室には全て視聴覚設備がついているのに対し3階の講義室では、半数ほどの講義室がついていない。この事は災害時の安全のため重い視聴覚設備は下の階に置かれたと考えられる。何も書かれていない空間については機械室や窓などがあった。



(教養的教育のガイドブックから転載)

2) 講義室の話

講義室のデータ

講義室	収容人数	コマ数	備考
K101	80	20	視聴覚有 西向き
K102	80	19	視聴覚有 西向き
K103	120	19	視聴覚有 西向き
K104	60	21	視聴覚有 東向き
K105	60	17	視聴覚有 東向き
K106	80	17	視聴覚有 東向き
K107	305	14	階段教室 南向き
K108	305	14	階段教室 北向き
K109	120	18	視聴覚有 東向き
K110	160	19	視聴覚有 東向き
K201	70	21	視聴覚有 西向き
K202			S C S
K203	120	17	視聴覚有 西向き
K204	80	20	視聴覚有 西向き
K205	80	20	視聴覚有 西向き
K206	60	19	視聴覚有 東向き
K207	60	13	視聴覚有 東向き
K208	60	20	視聴覚有 東向き
K209	120	18	視聴覚有 東向き
K210	165	20	視聴覚有 東向き
K211	264	20	視聴覚有 階段教室
K301	60	14	L-L教室
K302	60	14	西向き
K303	80	14	西向き
K304	80	13	西向き
K305	120	19	視聴覚有 西向き
K306	80	17	視聴覚有 西向き
K307	80	18	視聴覚有 西向き
K308	60	10	東向き
K309	60	13	東向き
K310	80	11	東向き
K311	80	14	東向き
K312	80	10	東向き
K313	120	22	視聴覚有 東向き
K314	150	21	視聴覚有 東向き
合計	3539	576	

次に各講義室のことについて書く。左に各講義室のデータを載せておいた。まず一番はじめに驚かされたデータは総合収容人数3,539人と総合講義数576個という数である。

K棟がその気になれば全広大生の4分の1が収容可能なのだ。576個もの講義が1週間で行われていると聞いて驚くのは私だけであろうか。

次に各階ごとのデータについてみてみる。ここには載せられなかったのだが各階の平均講義数は1階の教室が17.8, 2階が18.8, 3階が15.0であった。一番入りやすい2階が一番使われているということであろう。また収容人数の平均は1階が127人, 2階が107人, 3階が87人であった。この事は、下に人を沢山入れた方が建物が安定するためだと考えられる。また3階は収容人数は少ないが、だからこそ少人数教育に適しているとも言える。

3番目に各教室ごとの細かいデータについてみてみよう。調べていて気づいたことは、収容人数が多い部屋よりも視聴覚設備のある部屋の方がよく使われているということだ。K108やK107は収容人数は一番多いのだが視聴覚設備が無いためコマ数は14と意外に低めである。

視聴覚設備のない3階の部屋などは他の普通的の部屋に比べ3から6ぐらいのコマ数が少なくなっている。そのためか収容人数が多く視聴覚設備のあるK211やK313などが比較的多く使われているようだ。

3) 講義室以外の話

講義室以外のデータ

	1階	2階	3階
傘立て	5	8	4
ゴミ箱	5	3	3
消火器	7	6	6
消火栓	5	5	5
灰皿	8	9	5
水飲み場	1	2	1



上の表を見てもらいたい。ゴミ箱はなんと1階に一番多くおかれている。この事は1階にはロビーがあるため、そこで食事をとったりする人がいるためだと考えられる。事実、ロビーの周りには3個のゴミ箱が集中していた。またゴミというものの性質を考えた場合において下の方がたまりやすい為とも考えられる。

それに比べゴミ箱以外のもの（傘立て、灰皿、水飲み場）については2階が一番多い。この事は2階が一番、出入りしやすくなり利用されるためであると考えることができるであろう。前述の講義室のデータとあわせて考えても分かる。

さらに表を見てみると消火栓の数は各階共に5個ずつあることが分かる。火事は何処から起るか分からぬいため各階に同じ数だけ着けたのである。

次に見てもらいたいのはその隣にある写真だ。控え室とあるがいったい何をしている部屋なのだろうか。何処にあるかについてはここでは書かない。K棟にあるとだけ言っておこう。地図にもついていないはずだ。各自で探し当ててくれ。他にも興味深い写真をいくらかとってきたので掲載しておく。



←エレベーター内部の写真
やはり1階から3階まで



↑端から端まで撮った写真
いったい何階であろうか。

4) 終わりに

以上が、我々飛翔取材班が発見したK棟の秘密である。もし我々が発見した以上のK棟を知っている人がいたら、飛翔編集室まで一報願いたい。責任を持ってそのことをフォローしていくつもりである。

読者からの声

教務係長 河井孝之

昨年の仕事納めの会が終わり1階の事務室で皆と飲んでいたら、ひょんなことから、「飛翔」の話になり、学生係として次号の原稿作成者が未だ決まらず困っている様子でした。そこで、私の係のK君がターゲットとなりました、彼に書くよう、題材を色々アドバイスしていました。私も御鉢が回ってきました。K君に勧めた(K君も書くことになった)手前、私としても断り切れず、仕方なく引き受けたことにいたしました。まさにミイラ取りがミイラになった訳です。そこで読者の皆さんにお願いしたいのですが、「飛翔」の担当者はいつも困っていること、積極的な投稿を頂きますようお願いします。

さて、私は平成6年から総合科学部に勤務しておりますが、この間に係の名前が2度も変わりました。最初は学務第二係、教養教務係、そして現在の教務係です。係名の変更が示すように、この間、本学の教養的教育は2度も改革がなされました。平成6年度の改革は本当に必要であったのかとも思っていますが、平成9年度の改革は全学の教官が教養的教育を担当するという意味で大改革であったと思います。

カリキュラムが変わる度に学生の皆さんには迷惑をかけることになりますが、教養的教育の大部分を本学部の教官が担当している関係上、専門的教育についても、毎年、多少の変更があつてもやむを得ないことだと思います。

平成10年度も専門的教育のカリキュラムが多少変更されることになりました。そこで今度は、学生の皆さんにお願いしたいのですが、入学時に配布した学生便覧に載っている授業科目名が変わったり、開講を予定していた授業科目がなくなったりしていますので注意してください。このような場合は、授業科目の新旧対照表を作成し、掲示等により周知します。詳細は4月に授業時間割表及びシラバスを配布しますので各自で必ず確認して下さい。以上の2点をよろしくお願いします。

大学改革は、大学に属する人達全員の关心事だと思います。飛翔としても、これから改革の行方を注目していくことを考えています。河井さん、ありがとうございました。学生の皆さん、大学生活をスムーズにするためにも掲示には注意しておきたいものですね。

社会科学コース08 元吉弘司

前号53号のお洒落な表紙にひかれて、つい手にして読んでみた人もこの中にはいるのではないかでしょうか。毎回飛翔の発行されるのを楽しみに待つ一読者として、前号の思いきったデザインは、それまでのどうしてもお堅いイメージが付きまとっていた飛翔の「脱皮」を感じさせるものでした。さて肝心の内容のほうですが、特集としてオリキャンのレポートが組まれていて、半年間スタッフとしてオリキャンに携わったものとして、また来年度の代表を務めるものとして、たいへん参考になりました。新入生などに対するアンケートなどからオリキャンを評価するにはあまりに一面的であるため、飛翔という第三者的な立場からの評価は、時折覗かせるシアな意見に苦笑いしながらも今後の糧となるものでした。

ところで、このレポートを読んでくれた教職員の方は何人いるのでしょうか。回を重ねるに連れ、教職員の方々からのオリキャンに対する批判は高まるばかりです。例年とは違い、今年は自由参加ということで教職員の募集を行ったのですが、それにもかかわらず参加して下さった教職員の方々に対し、今回のオリキャンは多少なりともその意義を感じてもらうものとなったのではないでしょうか。学生側も学部行事としてのオリキャンの方針を半年間模索し続けてきました。その結果、比較的バランスのとれたものになったのだと思います。代表として、来年度のオリキャンでは、今回の議論の蓄積を活かし、さらなる可能性を求めて、より有意義なものにしなければと考えています。これを読む教職員の方々にも、是非オリキャンに対する何らかの関与を期待したいと思います。

ありがとうございました。今回の中グラビアはいかがでしたか？前号から表紙、グラビアは、写真部の方にお願いしております。今後も試行錯誤をしながら、より良い飛翔を目指して頑張っていきます。読者の方からのご批判をお待ちしています。

《編集後記》

三木直大

(編集委員長 人間文化コース 助教授)

53号・54号は、二人の学生編集委員長の力量と諸メンバーの奮闘で無事刊行することができました。とはいえたから見ているとわからないと思いますが、内情は火の車です。学部広報誌をうたいながら『飛翔』は今までよいのか、もっと実質的な教官・事務の交流や参加が必要ではないのかという疑問も、編集会議の場で学生諸氏から絶えず提出されていました。大きな課題です。しかし学部の主体である学生が、総科について広大について考え、それをおおやけにできる『飛翔』という場が、総科にとってかけがえのない貴重なものであるのは言うまでもないでしょう。こんな広報誌は他にないのでしょうか。なんとかよりよく継続・発展していければというのが、力量不足だった編集委員長の願いです。

松永孝治

(自然環境研究コース 2年 学生編集長)

飛翔54号。ここにお届けします。現状把握もままならぬまに飛翔54号始動。無計画な計画に従い勢いに任せ編集。そして気がつくと締め切り。人材面・機材面において整っているながら、それらが力を活かしきれずにいたのは、僕自身の無計画性が大きく影響…。読者の方、編集関係者の方々にお詫びを申し上げます。また、編集に関わって下さった人達に感謝いたします。そして見守っていて下さったひとたちにも…。

飛翔とは何だろうか?飛翔とはどんなことが出来るのだろうか?一番最初に編集室にきて思ったことである。そしてこの54号ができるあつた。飛翔に対しての問い合わせの答はでていない。54号、好き勝手やってしまったという感はある。納得できる仕上がりかと問われても、うなづくべくもない。しかし、実際に面白かっただけはいえる。不謹慎かもしれ

ないが編集作業を楽しんでいたような気さえする。最後に、54号を手がけた者として「飛翔」への意見・批評を承りたいと願う。

石橋淳也(生体行動科学コース 2年)

自由な時間の大半(と、授業時間少々?)を費やして飛翔改造計画に取り組んできた。迷惑(時にはそれ以上のもの)をお掛けした人達から「遊びや道楽とどこが違う」と問われれば、正直返事に窮する所はある。むしろ違わないからこそ許して欲しいと言って叱られるだろうか?魚

PS それでも、飛翔の表紙は「手」が多い。別に狙ってやっている訳ではないのだが…

植原暢哉(生体行動科学コース 2年)

どうやら我々は遺伝子の乗り物にすぎないようである。そして、遺伝子の目的はひたすら自分のコピーを増やすことのようである。実のところ個体の行動を決める最大のカギは種の繁栄でもなく、個体の利益でもなく遺伝子の利己性にあるそうだ。「そんなバカな!」と思うような人間行動の謎がある。しかし誰も悪くはない。悪いのは利己的遺伝子のようである。

追伸:成人式の祝辞で順風満帆が読めない人がいました。某県の教育委員会の委員長でした。どう思います?



安永洋介(数理情報科学コース 2年)

編集後記を書けるほど、飛翔に携わった訳じゃないんだけどなあ。

とりあえず、言いたいことがあるので、書かせてもらおう。

一つ、みんなどんな目的で大学に来たのか、今その目的はどうなったのか、教えて欲しい。二つ、幸雄、早く飯をおごれ。では。

飯寺純子(1年)

機械類が苦手な私にとってパソコンを使っての打ち込み・レイアウトは地獄でした。あろうことか半分以上英語だったし…。使い方を教えて下さった先輩方、有り難うございました。多分、次回も誰かに助けを求めると思いますけど…。

♥編集委員♥

教官:三木直大(編集長、人間文化コース助教授)

石倉康次(社会文化コース助教授)

宇佐美広介(数理情報科学コース助教授)

事務:玉田寛(学生係)

学生:2年

松永孝治(自然環境研究コース)

石橋淳也(生体行動科学コース)

植原暢哉(生体行動科学コース)

荻隆司(社会科学コース)

小林直樹(外国語コース)

田中芳典(物質生命科学コース)

田原和貴(人間文化コース)

西山恵美子(社会科学コース)

宮原千晶(地域文化コース)

安永洋介(数理情報科学コース)

渡邊論史(生体行動科学コース)

:1年

青松伴晃(チューター1)

飯寺純子(チューター1)

田村久(チューター4)

古川恵里(チューター6)

松田理恵子(チューター7)

:助っ人

長浜則夫(自然環境研究コース)

研究室紹介・特集

福田祥世(物質生命科学コース)

表紙・グラビア

山田悟史(数理情報科学コース)

特集

田村久(1年)

いとしのK棟よ。お前は何故にそんなに秘密が多いのか。

お前のことがもっと知りたい。そしてこれからも僕らを驚かせておくれ。

それではまた逢う日まで。さよならK棟。

松田理恵子(1年)

ホームページのところ、読んでいただけましたか?総科のホームページは他学部に比べてページが多くて見ごたえがあります。全部見るのは大変だけど、未開のページにいけたりして、きっと楽しいと思います。

福田祥世(物質生命科学コース 2年)

写真のネガをなくしてショック。すごく大事だったのに。皆さん大切なものはきちんと大事にしましょう!!本当に。

愛する写真を通して協力ができた良かったです。(迷惑をかけたという噂もある…)

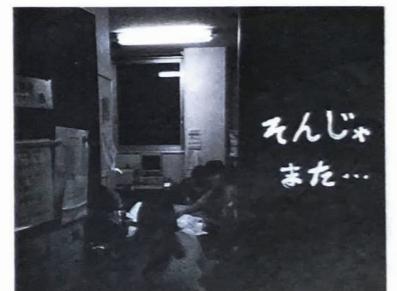
宮原千晶(地域文化コース 2年)

らんらんらん らんらんらん

あつ もくせいさんだ ぶー

おげんき? 平穏な日々

雪景色 (るんるんクン)



飛翔伝言板

●お詫びと訂正

飛翔53号の目次において、「よりよい授業を目指して」の記事をいただいた数理情報科学コースの奈良先生のお名前が「奈良重敏」となっておりましたが、これは「奈良重俊」の間違いです。先生には大変ご迷惑をお掛け致しましたことをお詫びし、訂正いたします。

また、4ページの座談会記事においては、出席者の一覧が校正段階で抜け落ちるというミスがありました。遅ればせながら、一覧を下に掲載させていただきます。

これらは全て編集委員による校正の不備が原因ですが、このようなミスを見つけられた方は、飛翔編集委員までご報告いただければ幸いです。

▼飛翔53号座談会 参加者一覧

石橋 淳也	(生体行動科学コース2年)	司会
田原 和貴	(人間文化コース2年)	書紀
安達 信裕	(地域文化コース2年)	論者
小林 直樹	(外国语コース2年)	
福島 聰子	(地域文化コース2年)	
宮原 千晶	(地域文化コース2年)	
元吉 弘司	(社会科学コース2年)	
田村 久	(総合科学部1年)	

●卒業生の方へのお知らせ

広島大学学部報「飛翔」は、卒業2年目以降の方に対しては希望者のみへの送付となっています。引き続き郵送を希望される方は、下記の住所宛にハガキでご連絡下さい。

〒739-8521 東広島市鏡山1-7-1 広島大学総合科学部飛翔編集委員会

学生編集委員・原稿募集

飛翔では学生編集委員及び原稿を随時募集しています

★ちなみに、飛翔54号では、以下のページは「非・学生編集委員」が担当しました。

- ・表紙、裏表紙
- ・グラビア・裏グラビア
- ・教育問題第1部のイラスト
- ・教育問題第2部の原稿執筆
- ・研究室紹介2コース
- ・その他のイラスト数点

編集のノウハウはお教えします。あなたも一度、編集作業を体験してみませんか？興味がある方、飛翔に載せて欲しい原稿をお持ちの方は、総合科学部事務棟1階、飛翔編集室までお越し下さい。お待ちしています。

表紙・グラビア説明



この写真は見ての通りピアノを弾く手です。男の子なのにきれいな手。
光のかんじとかが自分で好きだったので選びました。
この時弾いてたのは確か SIMULATION FOR YOUR HANDS だったはず。



青年Z イラスト作者：
木村 裕美（学教3年）

Here's Some More

